

開会行事

甲斐ム 今日はいよいよこれから国際シンポジウムの第3専門部会「国語教育と日本語教育の統合的研究 Part Ⅰ」ということで、この第2会議室で皆さんに一日いろいろと御検討をお願いしたいと思っております。まず、はじめに、当国立国語研究所の所長である水谷修の方から、第3専門部会のこと、国際シンポジウムのこと、それから、新プログラムのことを合わせてごあいさつを申し上げます。

水谷 おはようございます。大変お忙しいでありましょう中で、それに、まだまだ暑さの厳しい中で、ちょっと歩くと汗ばんでしまうような中、よくおいでくださいました。今日一日よろしく願いいたします。皆さん方には、今回の国際シンポジウムは国立国語研究所で第5回になりますが、他の分科会の場合と違いまして、年間を通してさまざまな形で新プログラムの一環としてのお仕事の中でお力添えをいただき続けているわけでありませう。改めて今日はということではないような気もいたしますが、一つよろしく願いしたいと思っております。

それから、第5回シンポジウムということで、昨日からこの研究所と代々木のオリンピック青少年センターの会場とに分かれて、シンポジウムを開催しております。昨日が第1日目、土曜日が最後の日、4日間ですが、中心テーマは「言語研究とシソーラス」ということで、金曜日の全体会議は一日かけてシソーラスの問題を扱います。それに関連して、第1専門部会は、昨日と今日やはりオリンピックセンターの方で、「言語研究とシソーラス」のテーマのもとに、研究発表等を行っております。昨日、会場の方に少し出ておまして、その中で、やはり研究会という皆が集まって色々な報告をし合う、あるいは議論をするということはいいことだなあと実感しました。短い時間でしたが、実感したことがいくつかあったのですけれども、例えば一つ、自分自身が不勉強だったものですから知らなかったことで、発表者の報告の中で最近、例えば外来語が世の中で問題になっておりますけれども、その反対の問題、外行語というのがやはり課題だろうとは思っておりました。その中で借用語の問題を取り上げた方がおられて、キャンノンという方の報告を土台にして、皆さんによく知られていないことなのですが、英語のOEDの中に取り込まれている外国のことば、要するに英語以外の言語から入っていることばですね。それについての紹介がありました。日本語というのは、実はフランス語に次いで、2番目にたくさんOEDに入っていることばなのだ、ということです。スペイン語が割に多かったのをそれを抜いたようですね。それは、OEDという非常にかたまった資料に基づいての研究ですから、もっと新しい資料に基づけばもっともっと違った状況があるのではないかと。国際的な視野に基づいた日本語の問題を考えるのに、もっともっと情報集めが必要なんだな、ということを実感させられました。研究会の意義はいろいろな面であると思うのですけれども、新しい知見が生まれてくるのは大きな収穫だろうと思うのです。そういった研究所のシンポジウムは明日、あさってと繋がりますので、もしお時間がおありでしたら明日は全体会がありますので、オリンピックセンターの方へお出かけいただけたらと思います。

新プログラムの紹介

先程、新プログラムの紹介をということがありました。もう皆さん方は何をやっているのかということをよくご存知でいらっしゃるから、改めてこういうことをしておりますとお話し申し上げるのは無駄なような気がいたしますが、国際社会における日本語の総合的研究ということで、5年間のプロジェクトを組んでおります。今年は4年目になるわけですが、その中身はまさに国際社会における日本語の問題を総合的に掴んでいこうということです。それは、4つの部分から構成されておまして、第1の班は実態をどう把握するかということを目的にして、世界調査をやる。30ヶ国についての調査をいたします。ただし、調査というものは常にそうですが、限定された事柄について、限定された方法の中で調査をいたしますから、全ての問題がわかるわけではない。ただ、狙い所としては、日本語の学習者がどれだけいるかということについては交流基金がすでにやってきております。そういうのではなくて、日本語がどれだけ使われているかということと、日本語についてどう感じているかということを探りたい。それを軸にしたい。ですから、それを調べるためにことばそのものだけではなくて、日本が好きか嫌いか、一言で言ってしまうと日本をどう見ているかというような要素についても探りながら調査をしていくということを目指しております。昨年前半の調査が15ヶ国について行なわれまして、今年は残りをいたします。30ヶ国にならないかもしれませんが、お金がちょっと足りないものですから。と言っても、昨年は2億、今年は1億5千万というお金を貰ってやっていますので、贅沢いかなと言われるんですけども、もっともっとやりたいし、それから、こういった調査というものは1回きりで終わらせてはいけない、5年ごとに、あるいは10年ごとにきちんとやっていかなければだめなのではないか。ドイツ辺りが非常に熱心に情報収集ということに力を注いでいる。物凄い勢いで各国の情報を集めるという仕事をしております。日本の今の行政改革の中でも多少そういう傾向があるようで、今後は通産省を解体して、産業省というものを成り立たせて、その中には情報関係の仕事が大切な要素として包み込まれるようではありますが、こういった流れは国際化、地球化が進んでいく中ではどこの国の人たちもきちんと押さえておかなければ生き残っていけない課題だろうと思います。

研究班1：「国際センサス」

それを直接狙うわけではありませんが、第1の班の仕事は世界における日本語の実態を把握しようということです。この中でも、まだ途中段階ではありますが、いろいろな問題が少しずつ分かってきている。一方で日本語は世界にどんどん広がっているというイメージが我々の中にできていますけど、簡単には言い切れそうもない。その印象を強く受けたのは最初の予備調査の段階のところで、プロジェクトに参加している広告会社の人の予備調査の中です。外国の新聞等に表れている日本語の量が意外に少ない、最近減ってきているということを知った時は大変ショックでした。そういうような意外に知られていない事実というのがある。それを真面目な姿勢で追究していくということが一方にないいろいろな形で生まれ出てきた研究の成果というものが妥当な位置を与えられない。説得力を持たないという可能性がある。特に、教育のような問題に絡んでいく場合には説得力を

持った事実の提示ということがとても大切になるだろうと思いますので、その意味では第1班の調査のような仕事は非常に大切だろうと思っております。

研究班2：「文化摩擦」

2つ目の班は調査研究を軸としているのですが、文化的な摩擦の問題を看板に抱えております。組織的には理論研究のチームと調査研究のチームに分かれているのですが、主な成果の積み重ねは調査研究の中で生まれてくるであろう。ここにおられる西原さんたちが中心になって仕事に取り組んで下さるのですけれど、日本人の言語使用の場面のビデオを用意して、それを世界のいくつかの国の人たちに見せる。実際にはその国に住んでいる日系の日本人の人たちに見せたりしながら、あるいは国内にいる外国人の人たちに見せたりしながら、何が問題点かを探っていく。これはある意味での実験的な仕掛けをするわけですが、従来割合総論的といいますか、ある考え方を前提にして文化の差はこういうものだろうということに進んできて従来の報告等のあり方に対して、実証的な手法でこういうことがわかったということを示せる成果が期待できるだろうと実は予想しております。理論研究のチームがありますことは決して無駄ではなくて、実証的なあるいは調査研究の中で表れていることを支える大きな力になりそうであります。今までに出てきていることのいろいろな報告・成果の中で密かに私は楽しんでおりますが、嬉しく思っていることが1つあって、それは理論研究班の中から出た一つのコメントあるいは仮説と言ってもいいのかもしれませんが、従来の日本研究の中で日本の文化の特徴について、日本文化の特徴は均質性にあるということが言われ続ける。多様ではないということが確かに言われ続けているのですが、この考え方は間違っている。古い時代のものの研究をしてみても、すでに多様な要素、国際的な要素を持っていたのである。そういう発想を用意しなければ、外国のものは多様で日本は均質だというやり方では問題は解明できないであろうというような示唆が出てきております。こういったことが研究の方法そのものの開発に対しても大きな貢献をしていくであろう。理論的な研究の追究と実証的・実験的なあるいは調査的な研究の遂行とは車の両輪のような働きをするであろうと思っております。

研究班3：「実験言語」

第3の班は、徹底的に実験研究の班でありまして、文字の認知に関する実験的な研究、音声に関する、これは教材開発まで進んでいっておりますけれど、実験的な手法による研究の遂行が行われているわけです。

研究班4：「情報発信」

この3つの班の他に第4の班があり、これが総合的なといいますか、応用的な研究、皆さんがなさって下さるのはその班の中の教育チームの仕事なのですが、これは表題から言いますと欠かせない仕事なのですけれども、研究を遂行していくためには物凄く難しい仕事だと思っております。さっき言いました1から3までのチームの研究は限定が非常に

つきりしてしまして、方法が明確である。ですから、問題にぶつかることはもちろんありますけれど、積み重ねということの中で結果としては何か生まれてくる可能性が非常に高い。それは偏っていてもちっとも構わないという前提がある。ところが、第4の班の、例えば教育チームの場合には、教育という大きな枠の中で結果を出していかなければならない。これが非常に辛い。物凄く大きなお仕事で教育チーム自体が重点領域一つを構成する。あるいはもっと大きな研究領域を構成するということで、そのことを対象にするというのが前提になっていますから、その中で方法論を考え、あるいは内容を分析していくという仕事をしなければなりませんので、課題としては非常に苦しい課題である。でも、何のために研究というのはいかすべきかということを考えますと、目的・目標というものを設定しないで進めるわけにはいけません。応用的な領域での研究のチームの中には、他にもいくつかあります。教育だけではなく、通訳、翻訳のチームもあるのですが、これも本当に今苦しんでいます。いろいろな問題はでてくるわけです。日本の大学の中に通訳に関する大学院レベルのコースが全くない。他の国にはあるのに何故日本にはないのか。これは問題だ、というようなことを始めとして問題の提起には結びついてくるけれど、どのようにしてその問題を解決するかについての提案ができるような研究の積み重ねは容易なことではできそうにない。これも、恐らくこれからどうすべきかという提言で終わるのではないかな、それでも十分だなどは思っておりますが、そういった課題が残されているわけです。こういった総合的などと言いますが、応用的な研究のことを考えます時に、20年ほど前に8年に渡って実施されたのですが、特定研究の言語に関する総合的な今の重点領域に当たる研究の歴史があります。これは、実は科学教育という領域が7年間行われていて、その科学教育のせいか、各教員養成の大学に今でも教育工学センターといったような形で組織としても残っておりますが、そういう科学教育の研究の中で行き着いたところは、科学教育を実際に効果的に進めるためには言語の問題を排除してはできない。だから、言語の人たちとの共同の研究をしなければならないということで始まった研究プロジェクトでした。これは、脳医学から始まって、法律あるいは心理学、あるいは言語学という言語に関わるさまざまな分野の人たちの参加を得て8年間続けたのですけれど、その時のことを反省してみますと、結果から見ると実はそれぞれに成果に向かって進んだのだけれども、成果の最後のまとめの報告書といえますか、刊行物が出なかったチームが2つあった。1つは心理学でした。心理学は教育がらみ、あるいは言語がらみではかなり重要な分野であるにもかかわらず、その当時の心理学の研究の関心は言語を手掛かりとして心理学を研究するというのはあったのですが、言語の問題を解明するための心理学の領域というのはまだ十分には生まれてきてなかったようですね。しかし、その後の20年間の発展は目覚ましいものがありました。今の認知科学的な立場に立つ心理学の研究というのは、教育の課題に関わる問題に明らかに貢献するであろうという段階に来ていると思います。今であれば、成果の刊行物はきっと出るに違いない。もう1つ成果の刊行物が出なかった領域は言語教育、外国語教育の領域でした。これが今私たちがその成果についてお答えを世に問うことができるものを持ち得ているだろうか。認知心理の領域と対抗するような力を我々は持っているかどうか。ということが一つの大きな課題だと思います。もちろん、焦ることはないと思います。大きな課題ですから、急ぎ過ぎて売り込むための一つの問題を出すというのは間違っていると思います。社会的なニーズが存在する限りはそれに答える形として学校教育の

中の言語の教育のあり方はこうであろう、英語教育はこうであろう、国語教育というのはこうでなければならない、ということについての提言を出していくことは大切なことであってこれはしなければならないことだとは思いますが、もう一方で内容、あるいは方法に関する問題の提起、あるいは示唆というものが与えられるような仕事はまだまだ十分な積み重ねが出てきていない。このチームだけがもしかするとそれに貢献できる一つの一番太目の道ではないかなと期待しております。きっと、いつも研究会を繰り返し聞いて下さって悩み続けておられることだろうとは思いますが、今日の報告のテーマなども拝見しますと、少なくとも現実の場の中に問題点の芽を見つけ出してそれをどう処理していくかということでお話しが進んでいるようであります。是非、この姿勢を持ち続けていただいて言語と言語の教育の研究、実は教育だけではないと思うのですが、その大きな課題に対しての大きな貢献をしていただけるような足掛かり、手掛かりが少しでも多く生まれ出てきたら、日本だけではなく、外国の研究者に対しても大きな力になり得るものだと信じております。目標は大きくて大変ですけれども、どうぞ一歩ずつ、いや半歩ずつ、四分の一歩ずつで結構でありますから、今日のお話し合いの中で何らかの実りが得られるよう願っております。長時間に渡りますけれども、どうぞいいお話し合いができますようお祈りしてご挨拶に代えたいと思います。

甲斐△ 教育チームに対する叱咤と激励のお言葉をいただきました。それでは、これから午前の部に入りたいと思います。午前の部は日本語教育の側面からの検討ということで、司会は西川寿美さん・吉野文さんの2人をお願いいたします。